

音声と敬語のあいだ ——場面・事象の改まり性と音声選択の関係に関する予備的研究——

尾崎 喜光*

The Crossing Field between Pronunciation and Honorifics: Preliminary Research on the Relation between the Formality of the Conversation Scene and the Choice of Pronunciation

Yoshimitsu OZAKI

1. はじめに

言語は音声・語彙・文法等の複数の要素から成っている。たとえば形態音韻論など、これら複数の要素を関連させつつ行われる研究もあるが、研究全体に占める割合はそれほど高くなく、多くはそれぞれ独立に研究を進め深めている。特に音声と待遇表現(敬語)・場の改まり性を関連づけての研究は、それが意識されやすい連母音 [ai] とその融合形 [e:] の選択等一部を除けば、未開拓な部分が多い。

通常意識されにくいのが、場面の改まり性と関連しそうな音声事象に連母音 [ei] がある。

連母音 [ei] は、仮名表記すると、たとえば「計画」は「けいかく」、「音声」は「おんせい」のように、正書法ではかつての連母音の発音を反映したものとなっているが、現代日本語(共通語)では通常は [ei] ではなく [e:] で、すなわち「けーかく」「おんせー」と発音される。もっとも、上野善道編(1989)所収の言語地図によれば、かつての [ei] は四国・九州の一部に残存している。この傾向が現在も見られることについては、2009年に筆者が実施した全国多人数調査で確認しているが、その分析については別稿にゆずる。

通常は [e:] で発音される共通語においても、場合によっては [ei] で発音されることがある。それには場面の改まり性等が関係していそうである。生命保険会社「ライフネット生命保険株式会社」のテレビコマーシャルでは、コマーシャルの最後に軽快なメロディに乗せて会社名「ライフネット生命」をコールしているが、そのときの「生命」の発音は「せーめー」ではなく「せいめい」であり、「生」も「命」も [ei] となっている。重要な名称を公共媒体を通じて告げるような改まり性の高い状況が関係している可能性が考えられる。また、「歌う」という言語行動様式もこのことに関与している可能性がある。

こうした現象は、筆者が最近注目して研究している、動詞ないしは形式動詞の「言う」の語幹を本来の「い」で発音するか(「いった」「いわない」等)、それともその後変化した「ゆ」で発音するか(「ゆった」「ゆわない」等)にも該当する可能性がある。

キーワード：音声の多様性、音声変化、「言う」の語幹の発音、連母音「エイ」の発音、CM、礼拝

Keywords: Phonetic Variation, Phonetic change, Pronunciation of stem “iu”(say), Pronunciation of Japanese Diphthong [ei], CM, Worship

* 本学文学部日本語日本文学科

そこで本稿では、母音の部分が仮名「えい」で表記される語句（実際には「えい」だけでなく「けい」「せい」「てい」等も含む）を、連母音が融合した [e:] で発音するかそれとも連母音のままの [ei] で発音するか、また「言う」の語幹を「い」([i]) で発音するかそれとも「ゆ」([ju]) で発音するかという2点について、場面の改まり性（広い意味での待遇性）等の違いと関連づけて分析する。なお本稿は、いまだデータ量の少ない段階で行なう予備的分析であり、データ量を充実させた本格的な分析は今後行なう。^(注1)

2. 「言う」の語幹の発音と改まり性の関係

動詞・形式動詞「言う」の語幹を本来の「い」で発音するか、それともその後変化した「ゆ」で発音するかについては、実際に発話された多数のデータを対象に筆者も分析した(尾崎喜光2017・2019)。場面の改まり性が多少関係する知見としては、普段の会話では語幹の発音が「ゆ」であっても、言葉を強く意識すると考えられる朗読という状況では、本来の発音である「い」への切り替えがなされている可能性が考えられることを尾崎喜光(2019)で指摘した。

本稿では、場面の改まり性により直接的に関係するデータとして、かつて国立国語研究所が実施した「学校の中の敬語」調査のうち面接調査の録音データの一部を、筆者が国立国語研究所において改めて聴取してデータ化した資料を分析する。なお筆者は、この調査の企画・実施・分析に深くかかわっている。

この調査では、東京都・大阪府・山形県（三川町）の中学校・高等学校の生徒で、部活動・生徒会活動・学級のいずれかで接点があり、学校で多少なりとも会話をするもののある6人1グループを単位とする生徒たちに教室に集まってもらい（合計57グループ）、2人ずつの全ての組み合わせ（=15組）において、指定された会話場面を想定してもらいながら、ペアによる短い往復の会話をできるだけふだんどおりに行なってもらった。調査は1989～91年に実施した。調査の詳細については国立国語研究所編（2003）および『日本語大事典』（「学校の中の敬語」の項）で説明している。

本稿ではこのうち、ペアの一方の生徒に「さっきの説明がわからなかったから、もう一度言ってくれ」という主旨のことをもう一方の生徒に対し言ってもらい、これに対しもう一方の生徒には「わかった」という主旨の短い応答をしてもらった。本稿ではこのうちの前者の発話回答を分析対象とする。

場面は2つ設定した。ひとつは「休憩時間」であり、もう一つは「会議・ミーティング」である。前者は改まりの特でない場面、後者はそれがある場面である。この違いにより、表現の選択がどう変わるかを見ることを調査の目的とした。

本稿では、質問する発話の「言ってくれ」「言ってください」等の「言って」「言うて」に見られる語幹「言」の発音が、上記2つの場面により変わるかわからないか、すなわち音声のバリエーションの選択に場面の改まり性が関与しているか否かを分析する。

データ総数は3,802件であるが、「説明してください」のような「言う」ではなく「説明する」等を用いた回答もある。これらを除く本分析での有効データは2,735件（71.9%）である。このうち現時点で調査済みのデータは、コロナ禍で国立国語研究所での調査が限られていたことから237件である（進捗率8.7%）。調査済みの学校は東京都の中学校3校（6グループ=36人）である。地域が東京都であることもあり、ウ音便化した「言うて」とい

う活用形は見られず、全て促音便の「言って」であった。

237件の発話データのうちの一部は、調査の場にはいない指導教員を話し相手として想定して発話してもらったものである。データとして多少異質であることから今回の分析ではこれを除外し、実際に目の前にいる別の生徒に対する発話のみを分析対象とする。該当するデータは218件である。

この218件のデータについて、「会議・ミーティング」と「休憩時間」の2つの場面に分け、件数および人数の点から、「言って」の語幹を「ゆ」と発音した比率を示したのが図1である。いずれも「全体」の下に、回答者を男女に分けて分析した比率も示した。

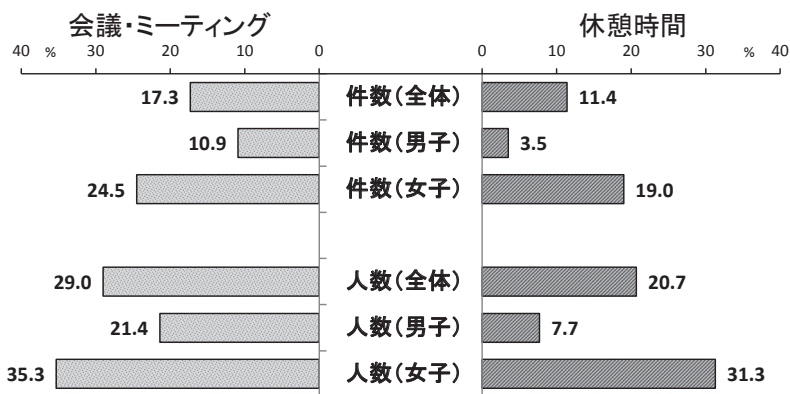


図1 「言(って)」を「ゆ」と発音した件数・人数の場面比較

これによると、件数については、「ゆ」で発音されたケースは全体として10数パーセントにとどまり、1990年前後の東京の中学生において優勢な発音とはなっていないことが確認される。ただし男女差があり、「ゆ」の発音は男子よりも女子で優勢である。

2つの場面を比較すると、絶対値として「ゆ」はともに少ないものの、相対的には「休憩時間」よりも「会議・ミーティング」において「ゆ」と発音される傾向が見られる。この傾向は男子にも女子にも共通する。

これを人数の比率という点から見ると（両方の発音をした生徒はダブルカウントされている）、やはり「休憩時間」よりも「会議・ミーティング」において「ゆ」と発音される傾向が見られる。この傾向は男女共通に認められる。

すなわち、「ゆ(って)」という発音は、件数の比率から見ても人数の比率から見ても、改まり性の高い場面で出現しやすい傾向が認められる。「ゆ」は本来は“正しく”ない発音であるが、近年ではむしろ正しい発音として、おそらく無意識のうちに使われるよう変化している可能性が考えられる。これには、尾崎喜光(2017・2019)で確認したように、終止形の「言う」の語幹が現代日本語ではほぼ完全に「ゆ」と発音されていることが影響している可能性が考えられる。

本データの聞き取りを今後完了させてデータ数を増やしたときにもこうした傾向が見られるか、また本調査からおよそ30年経過した現在はどうか等が注目される。

3. 連母音「えい」の発音と改まり性の関係

次に、連母音「えい」を「えい」〔ei〕と発音するか、それとも融合・長音化した「えー」〔e:]〕と発音するかについて、場面の改まり性との関連から見てみよう。

予備的調査として収集し今回分析対象とするデータは、次の番組等から得たものである。

- (1) 朗読家・幸田弘子氏による樋口一葉『たけくらべ』の朗読の発音と、これを話題にしたアナウンサーとの対談の発音の比較
- (2) ナレーター・久米明氏による紀行ドキュメンタリー番組『すばらしい世界旅行』のナレーションの発音と、番組内での番組ディレクターとの会話の発音の比較
- (3) 女優・声優の加藤道子氏によるNHKラジオの朗読劇『日曜名作座』の朗読の発音と（朗読劇の相手役は森繁久彌氏）、その番組を振り返ったNHKラジオの『人生読本』のモノローグの発音の比較
- (4) 女優・竹下景子氏のNHKラジオの朗読劇『新日曜名作座』の朗読の発音と（相手役は西田敏行氏）、紀行番組『竹下景子 汗と涙の中国雲南大紀行～秘境の肝っ玉母さんに体当たり修行～』の現地ロケおよびナレーションの発音の比較
- (5) 生命保険会社のラジオCM・テレビCMにおける「生命」の発音
- (6) 西東京キリスト教会（東京都西東京市）の礼拝における牧師の発音

(1)～(5)は「放送ライブラリー」（横浜市）において番組を視聴しデータを収集・蓄積した。このうち(1)は、動詞「言う」の語幹の発音（「い」か「ゆ」か）の分析のために過去に用いたことのある番組であるが（尾崎喜光2019）、今回は連母音「えい」の分析のために改めて聞き直した。

(1)～(4)は、改まり性が高いのではないかと考えた発話場面（原稿を読む朗読・ナレーション）での発音と、それが低いのではないかと考えた発話場面（原稿を読むわけではなくある程度自由度の高い会話やモノローグ）での発音を比較することを目的とした。

(4)は、現地ロケにおける自由度の高いレポートにおける発音を観察することを想定していたが、ロケ後のナレーションも含まれている。ナレーションの部分は原稿があることから改まり性の高い場面のデータとした。

(5)は公共媒体での自社名のコール等、改まり性や発音の明瞭性が求められると推測されるジャンルとして調査した。「生」と「命」の両方に「えい」が含まれる「生命」の発話が期待される生命保険会社のCMをデータとした。対比するデータは特にない。

(6)は改まり性の高い言語場面のひとつと考えられるキリスト教会（プロテスタント）の礼拝のうち、牧師（60代・男性；東京都出身）による説教と、その前後に含まれる牧師による司会および牧師がリードする賛美を分析対象とした。カトリック等の礼拝と異なり儀礼的な要素は少ないが、日常から離れた改まった雰囲気の中で礼拝が進められている。事後にアップロードされた動画を視聴してデータ化した。

以下にそれぞれの分析結果を示す。

3.1. 朗読家・幸田弘子氏の発音

樋口一葉『たけくらべ』を朗読するときの発音と、この番組や朗読活動を話題にした対談での発音を比較した。なお番組内での朗読は、番組時間の制約のためか、作品の一部は省略されている。番組情報は次のとおりである。このうち〔5・終〕の一部に、番組司会

の葛西聖司アナによる幸田弘子氏へのインタビュー（対談）がある。

・『よみがえる一葉 樋口一葉・没後百年〔1〕～〔5・終〕』（NHKテレビ；1996年11月5日～9日放送）

(1) 朗読での音声

まず朗読の部分の音声を分析する。

ひらがなで「えい」と表記されるデータは53件ある。このうち3件は、「出入り」「泣き寐入り」「音色」という複合語の語境界に現われるケースであり、全て「えい」と発音されている。東京都出身の60代のある音声研究者は、調音音声学に関する講義動画で「母音の音色」の「音色」を「ねーろ」と発音しており、複合語の語境界でも「えー」が現れうることが確認されるが、それほど一般的ではないと思われることから、本稿ではこれらは分析の対象外とした。また、「病の故（せい）」の「故（せい）」は、「えい」ないしは「えー」という微妙な発音であったが、『日本国語大辞典 第二版』によると、「せい【所為】」に「【所為】の音「しょい」の音変化か」と注記があり、複合語の語境界に準ずる可能性があることからこれも分析の対象外とした。さらに「角兵衛獅子」の「兵衛」は「べー」と発音されたが、かな表記が「べい」か「べー」か微妙であることからこれも分析の対象外とした。

以上の計5件を除く48件を実際の分析対象とする。全て漢語であり、1件を除き全て「えー」と発音されていた。その1件は、「横ぶとりして背（せい）ひくく」の「背（せい）」であった。『日本国語大辞典 第二版』によると、「せい【背・脊】」は「【せい（勢）】と同源か」と注記されていることから、複合語の語境界等ではない漢語と判断した。

結局、48件のうちほぼすべてが「えー」と発音されており、改まり性が高いと考えた朗読において「えい」と発音されることはほとんどなかった。

(2) 対談での音声

次に対談での音声を分析する。

残念ながら該当データは6件のみであった。複合語の語境界での出現はなく、全て有効なデータであった。6件とも漢語であり、いずれも「えー」と発音されていた。

(3) 朗読と対談の音声の比較

朗読も対談もほぼ全て「えー」と発音されており、両者による違いはなさそうである。そもそも改まり性という点で、朗読と対談との間に想定したほど大きな違いがないためなのかもしれない。

3.2. ナレーター・久米明氏の発音

紀行ドキュメンタリー番組『すばらしい世界旅行』のナレーションの発音と、番組内での番組ディレクターとの会話の発音を比較した。番組情報は次のとおりである。

・『すばらしい世界旅行（総集編） 森の狩人ピグミー』（日本テレビ放送網；1972年10月8日放送）

(1) ナレーションでの音声

番組の動画を見ながら担当ディレクター（取材者）と会話する場面を含む回の番組であることは確認していたが、会話中に「えい」は含まれていなかった。そこで本データについては、ナレーションでの音声と会話での音声の比較は断念し、ナレーションの音声のみを分析対象とする。

データは42件あった。このうち9件は「～ている」およびそのバリエーションであった。たとえば「決めている」「住んでいる」「決められていて」などである。これらは「い」を省略して「決める」「住んでる」「決められてて」と発音されることはあっても、「決めてー」「住んでー」「決められてーて」と「えー」で発音されることは現在のところないことから分析の対象外とした。これらを除く33件を実際の分析対象とする。

全て漢語であるが^(注2)、「えー」が30件、「えー」ないしは「えい」が1件、「えい」が2件であった。「えい」は「定住化」の「定」であり、2回出現する。いずれも番組本編が始まる前の説明である。番組本編に「定住せず」が1回出現するが、この「定」は「えー」と発音されている。番組の導入という“位置”が改まり性に関係しているのかもしれないが、この位置に来れば全て「えい」と発音されているというわけでもない。「政府」「生活」などもこの位置に来るが、「政」「生」はともに「えー」と発音されている。「えー」ないしは「えい」の1件は「完成」の「成」である。出現する位置は番組の冒頭ではない。

原稿を読むことから「朗読」と同様に改まり性が高いと考えた「ナレーション」でも、ほとんどは「えー」と発音されていた。そもそも改まり性がそれほど高くないためなのかもしれない。

3.3. 女優・声優の加藤道子氏の発音

NHKラジオの朗読劇『日曜名作座』の朗読での発音と、その番組を振り返ったNHKラジオの『人生読本』のモノログでの発音を比較した。番組情報は次のとおりである。

- ・『日曜名作座 セロ弾きのゴージュ』（NHKラジオ；1970年7月5日放送；原作＝宮沢賢治）
- ・『日曜名作座 大つごもり』（NHKラジオ；1972年12月24日放送；原作＝樋口一葉）
- ・『日曜名作座 家族〔1〕～〔4〕』（NHKラジオ；1984年3月4日・11日・18日・25日放送；原作＝山口瞳）
- ・『人生読本 日曜名作座の40年 加藤道子（声優）〔1〕～〔3〕』（NHKラジオ；1997年1月9日・10日・11日放送）

(1) 朗読劇での音声

データは13件あった。複合語の語境界での出現はなかった。全て漢語であり、全て「えー」と発音されていた。

(2) モノログでの音声

データは74件あった。このうち「～ている」およびそのバリエーションが9件、「～ていただく」およびそのバリエーションが2件あった。これらを除く63件を実際の分析対象とする。

全て漢語であるが、「えー」が60件、「えい」が3件であった。「えい」と発音されたのは、「稽古」の「稽」、人名「東野英治郎」の「英」、「一気呵成」の「成」である。ただし「稽古」の「稽」は「けー」と発音されるケースも2件あった。

(3) 朗読劇とモノローグの音声の比較

いずれもほとんどのケースで「えー」と発音されていた。原稿があるわけではないモノローグでも「えい」と発音されることが多少はあるが、これが何に起因するかは現在のところ不詳である。

3.4. 女優・竹下景子氏の発音

NHKラジオの朗読劇『新日曜名作座』の朗読の発音と、紀行番組『竹下景子 汗と涙の中国雲南大紀行～秘境の肝っ玉母さんに体当たり修行～』の現地ロケおよびナレーションの発音を比較した。番組情報は次のとおりである。

- ・『新日曜名作座 藤沢周平短編集〔1〕 明烏・枯野』（NHKラジオ；2018年4月8日放送；原作＝藤沢周平）
- ・『新日曜名作座 藤沢周平短編集〔2〕 日暮れ竹河岸・雪の比丘尼橋』（NHKラジオ；2018年4月15日放送；原作＝藤沢周平）
- ・『竹下景子 汗と涙の中国雲南大紀行～秘境の肝っ玉母さんに体当たり修行～』（関西テレビ放送；2001年12月16日放送）

(1) 朗読劇での音声

データは63件あった。このうち「～ている」およびそのバリエーションが37件、「～て行く」のバリエーションが1件、「血だらけになって家（いえ）に」のような「て」の直後にたまたま「い」で始まる名詞が接続するケースが3件あった。これらは分析対象から除外した。また、「雪が降り出したせいか」の「せい」1件も、複合語の語境界に準ずる可能性があることから対象外とした。これらを除く21件が実際の分析対象である。

いずれも漢語であった。このうち「えー」が20件、「えい」が1件であった。唯一「えい」と発音されたのは、「しかし亭主が差し出した吸い物をすすっているうちに」という文脈における「亭主」の「亭」であった。ただし「亭主」の「亭」を「えー」と発音するケースも5件あり、「えい」はむしろ例外的であった。

(2) 現地ロケおよびナレーションでの音声

現地ロケでの発話中に出現したデータは1件のみであった。「あー、綺麗な水ねー。」という文脈での「綺麗」の「麗」であり、その発音は「えー」であった。

これに対し、ロケ後に自ら付けたナレーションには該当データが20件出現した。このうち「～ている」およびそのバリエーションが6件、「優しさでいっぱい」という「で」の直後にたまたま「い」で始まる語が接続するケースが1件あった。これらを除く13件が実際の分析対象である。

いずれも漢語であり、「えー」が12件、「えい」が1件であった。唯一「えい」と発音されたのは、「新しい時代に、どんなうに成長するのか楽しみです。」という文脈における「成

長」の「成」であった。これは番組の締めくくりに現われる発話であり、そのことが改まり性に関係し、「えい」と発音されたのかもしれない。

(3) 朗読劇とナレーションの音声の比較

いずれも原稿を読むものであり、その点で違いはないが、両者を比較すると、いずれもほとんどのケースで「えー」と発音されていた。

3.5. 生命保険会社のラジオCM・テレビCMにおける「生命」の発音

分析対象とした番組情報は次のとおりである。

- ・生命保険「黄色い帽子」(生命保険協会；1969年放送)
- ・生命保険「自分自身に責任を持つ」(生命保険協会；1969年放送)
- ・生命保険「日本生命おばちゃんの城下町」(日本生命保険；1973年放送)
- ・生命保険「切火」(日本生命保険；1977年放送)
- ・明治生命保険「あなたに会えてシリーズ2001 『たったひとつのたからもの』」(明治生命保険；2002年放送)
- ・ネオファースト生命保険「ショッカーの妻 治療費篇／目玉のおやじの妻 ノンスモーカー篇／くだおれ太郎の妻 健康割引篇／ショッカー部長の妻 健康割引篇」(ネオファースト生命保険(第一生命グループ)；2016年放送)
- ・住友生命 Vitality「4 Types of Man #0「プロログ」／4 Types of Man #1「“Insurance” 保険大好き男」／4 Types of Man #2「“I-muscle” 今を生きるマッスル」」(住友生命保険；2018年放送)
- ・生命保険「わが父 古賀政男／阿部進／サトウハチロー」(朝日生命保険；1973年放送)
- ・生命保険「日生のおばちゃん」(日本生命保険；1976年放送)
- ・生命保険(子供の保険)「芽生え」(日本生命保険；1977年放送)

データは35件あった。分析対象から除外すべきデータはなく、全て漢語であった。

このうち「えー」は22件、「えい」は13件であった。CMにおいても「えい」よりも「えー」の方が優勢であるが、これまで見てきた朗読やナレーション等よりも、「えい」の出現比率は相対的に高い。この「えい」は、「生命」の「生」にも「命」にも出現する。

「えい」と発音されたケースをさらに詳しく分析すると、CMソングの中での出現が多い。たとえば「♪日生のおばちゃん自転車で」の「日生」の「生」、♪朝日(あさ～ひ)生命、ホッホッの「生命」の「生」などである。逆にCMソングの中で「えー」と発音されたケースはなかった。CMソング以外でも「えい」が現われ、社名のコールの中で「日本生命」「住友生命バイタリティー」は、「生」も「命」も「えい」と発音されていた。もっとも「ネオファースト生命」は、「生」も「命」も「えー」であったことから、社名のコールだからといって全てのケースで「えい」と発音されるわけでもない。また、「家庭の柱、お父さん。家庭の安心、朝日生命。」や「それが日本生命の願いです。」も、「生」も「命」も「えー」と発音されていた。文の一部に埋め込まれる場合やそれに近い場合は「えー」と発音されやすいということかもしれない。

3.6. キリスト教（プロテスタント）の礼拝における牧師の発音

西東京キリスト教会（東京都西東京市）の礼拝（司会・説教・賛美）における主管牧師の発音を調査した。牧師は東京都出身で、60代の男性である。2021年8月22日・29日の2回の礼拝を対象とし、インターネットにアップロードされた礼拝の動画（現在は削除）を視聴してデータを収集・蓄積した。

データは98件あった。このうち「～ている」およびそのバリエーションが25件、「～て行く」が2件、「～ていただく」のバリエーションが2件あった。また、「受け入れた」という複合語の語境界での出現が1件あった。これらを除く68件が実際の分析対象である。全て漢語であった。

このうち「えー」が47件、「えい」が18件、「えー」ないしは「えい」が3件であった。件数の割合としてはやはり「えー」の方が優勢であるが、「えい」も一定程度の割合を占めている点が注目される。

「えい」と発音されたのは、「栄光」の「栄」、「聖霊」の「聖」と「霊」（聖書からの引用が少なくない）、「靈的」の「霊」、「自制」の「制」（聖書からの引用）である。このうち「栄光」は賛美（2曲）にのみ現われ、全て「えい」と発音されていた。なお「聖霊」は、「聖」も「霊」も「えー」と発音されるケースもある。これらが「えい」と発音されるか「えー」と発音されるかはおおそ半々であった。「自制」の「制」も、「えー」や両者の中間くらいで発音されることもある。

これらのデータから、礼拝の中でも賛美といった歌を歌う言語行動では「えい」で発音されやすいこと、またキリスト教会において重要とされ、その語の意味にある種の重みを帯びる「聖霊」や「靈的」などは、常にというわけではないが、しばしば「えい」と発音される傾向が見られる。事象やそれを表わす語自体が持つ改まり性が、「えい」の発音に関与している可能性が考えられる。

4. まとめと今後の課題

動詞・形式動詞の「言う」の語幹を本来の「い」と発音するかそれとも新しい「ゆ」と発音するかについて、国立国語研究所の「学校の中の敬語」調査のうち面接調査の録音データを聴取し、「会議・ミーティング」と「休憩時間」を比較ししつつ、「言って」という活用形において「ゆ（って）」と発音した件数・人数の比率を分析した。その結果、改まり性が低い「休憩時間」よりもそれが高い「会議・ミーティング」において「ゆ」と発音される傾向が見られた。このことから、本来は“正しく”ない発音である「ゆ」が、近年ではむしろ正しい発音として無意識のうちに使われるよう変化している可能性が考えられる。

連母音「えい」を「えい」([ei])と発音するか、それとも融合・長音化した「えー」([e:])と発音するかについて、種々のデータを対象に、場面の改まり性と関連づけて分析した。少なくとも現在の日本語では「えー」となりえない「～ている」や「～て行く」等を除いたデータを分析したところ、非常に多くのケースで「えー」と発音されており、「えい」という発音は例外的であった。そうした量的安定性もあり、原稿を読むことから改まり性が高い状況と考えた朗読（劇）やナレーションと、原稿を読むわけではないことからそれが低い状況と考えた対談やモノログとの間にはほとんど違いが見られなかった。そもそ

も改まり性という点で両者にそれほど大きな違いがないためであるからかもしれない。

テレビやラジオのCMや、キリスト教会の礼拝における牧師の発音においても、「えい」よりも「えー」の方が優勢であるが、上記と比べると「えい」で発音される比率が相対的に高い。特にCMソングでは「えい」と発音される傾向が極めて高い。礼拝における賛美にも同様の傾向が見られることから、「歌を歌う」という言語行動では「えい」と発音されやすいと言える。このほか、礼拝の説教においては、重要な語やある種の重みを帯びる語は、しばしば「えい」と発音される傾向が見られる。このことから、事象やそれを表わす語自体が持つ改まり性が「えい」の発音に関与している可能性が考えられる。

本稿は、いまだデータ量が十分ではない段階での研究ノートとしての分析であった。今後さらにデータ量を増やし、本稿で指摘したことが安定的に言えるか否かを確認するとともに、現在ではかなり劣勢となったもののまだ完全に衰退したわけではない本来の「えい」が使われるのはどのような要因によるのかなどについて明らかにしていくことが今後の課題である。

注

- 1 本稿は次の研究助成を受けて行った研究成果の一部である。
 - ・JSPS科研費JP18H00673（研究課題「共通語の基盤としての東京語の動態に関する多人数経年調査」；研究代表者・尾崎喜光）
 - ・JSPS科研費JP20K20710（研究課題「現在進行中の日本語の音声変化を把握するための既存の映像資料・録音資料の活用研究」；研究代表者・尾崎喜光）
- 2 本稿で分析対象とした資料には全く現れなかったが、漢語ではなく和語でも、たとえば語幹の末尾が「え」となる動詞で連用形がイ音便化する場合は「えい」となる。たとえば「招いた」とか「防いで」等である。

参考文献

- 上野善道編（1989）『日本方言 音韻総覧』（小学館） *非売品
- 尾崎喜光（2017）「「言う」の発音に関する研究」『清心語文』19
- （2019）「朗読における「言う」の発音に関する研究」『ノートルダム清心女子大学紀要 日本語・日本文学編』43-1
- 国立国語研究所編（2003）『国立国語研究所報告120 学校の中の敬語 2 面接調査編』（三省堂）
- 佐藤武義・前田富祺編集代表（2014）『日本語大事典』（朝倉書店） *「学校の中の敬語」の項（執筆担当者は尾崎喜光）